

文部科学省博士課程教育リーディングプログラム

**筑波大学グローバル教育院**

**エンパワーメント情報学プログラム**

**外部評価（平成 30 年度実施）**

評価結果



PH.D. PROGRAM IN  
EMPOWERMENT  
INFORMATICS



**筑波大学**  
*University of Tsukuba*

平成 30 年 9 月

# 目 次

## I. 外部評価の実施にあたって

- (1) 外部評価の目的
- (2) 平成 30 年度外部評価の経緯

## II. プログラム全体の総合評価

## III. 今後の展望への期待等意見

## I. 外部評価の実施にあたって

### (1) 外部評価の目的

エンパワーメント情報学プログラムは、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮し、人をエンパワーするシステムをデザインできるグローバル人材を養成する、5年一貫の博士課程学位プログラムである。平成25年度、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択された。

本プログラムが外部評価を実施する目的は、プログラムによる自己点検評価の実施後、外部の有識者による検証を行うことで、プログラムの活動の現状と課題を明らかにし、教育の質の向上を図ることにある。

### (2) 外部評価の経緯

博士課程教育リーディングプログラムに採択されたプログラムは、採択後4年目に中間評価、7年目に事後評価を受けることになっている。評価は、博士課程教育リーディングプログラム委員会の部会長会議及び類型別審査・評価部会において実施される。

本プログラムは、平成28年度に中間評価を受けるにあたり、平成27年度及び平成28年度の外部評価は、中間評価に際して日本学術振興会に提出する中間評価調書に沿って項目を設定し、実施することとした。平成29年度及び平成30年度は、中間評価後となるため、中間評価調書に沿った項目を設定するのではなく、外部評価委員の自由な観点から総合的に評価していただく事とした。

実施体制は、「エンパワーメント情報学プログラム外部評価実施要項」（平成27年5月22日、エンパワーメント情報学プログラム運営委員会決定）に基づき、平成27年7月より、産業界、学界の有識者5名を外部評価委員として委嘱した。

今までに、第1回外部評価委員会は平成27年11月25日（水）、第2回外部評価委員会は平成28年8月5日（金）、第3回外部評価委員会は平成29年7月25日（火）及び7月27日（木）に筑波大学エンパワーメントスタジオにて開催してきた。第4回外部評価委員会は、平成30年7月25日（水）に、原島博委員、岩野和生委員、土井美和子委員、萩田紀博委員に筑波大学エンパワーメントスタジオに来ていただき、当プログラムを評価していただいた。

本稿は、第4回外部評価委員会開催後、各委員による外部評価コメントシートの記載内容をまとめたものである。

平成30年9月  
エンパワーメント情報学プログラム  
外部評価委員会事務局

## Ⅱ. プログラム全体の総合評価

本プログラムは、博士課程教育リーディングプログラムとして当初の計画を上回る成果を着実に挙げてあり、その意味で関係者の労を多としたい。この外部評価委員会における前回の指摘事項についても、きちんと対応されており、学生との面談においても、学生の満足度はかなり高いとの印象を受けた。

プログラム全体としては順調に進んでいる。

学生とのインタビューを通して感じたことだが、積極的で、しっかりコミュニケーションをとろうとする姿勢は好ましい。

しかし、以前から指摘してきた以下の点については、是非、今後とも教授陣、学生を含めて考えて行って欲しい。つまり、この「エンパワーメント情報学」という新しい学問分野を構築されようとしていることは大きな意味があるはずである。この点については、やはり人間やコミュニティのアイデンティティーは何かというところから考察し、何をエンパワーしていくのかという考察とそのための科学的方法論という体系づけが必要と考えられる。これらの努力があつて、初めて各デモンストレーションや、発表が一過性のものに終わらず、追隨者を生み出すのではないだろうか？とくに博士課程を終える学生は今後研究者や実務者として長く活動していく基礎をこのプログラムで得なければならない。そのためには、どこかで分野横断的に深く考察して、新しいことを切り開く経験が役に立つと信じている。

上記のコメントに対する考察と展開を次回のアセスメント会議では、聞きたい。

分野横断での学位授与に関して、分野の特性を維持しつつ、研究指導・学位論文審査システムを確立しつつあることは大いに評価できる。

分野横断での学位授与については、異なる分野間での評価視点の違いを学生も指導者も相互に理解するようになったことが大きな成果である。エンパワーメント情報学の出口には、複数のステークホルダーが存在するわけで、その複数のステークホルダーそれぞれにどのような価値を与えられるかについて、学生も含めて、深く考えることが重要である。

修了者も各自のリーダーシップを生かしつつ、民間企業やアカデミアなどに就職して活躍を始めていることも高く評価できる。リーディング大学院の出身者が企業で活躍していることを経団連にぜひアピールすべきである。

前回の指摘事項に対する回答、現在の進捗状況をお聞きして、最終段階のフェーズに移っていると実感しました。本プログラムを推進するには、次の点を引き続き検討してほしいと思います。

- ・アーティスト3名が本プログラムを終了したことは今後の人間情報学を推進する上で大きな1歩を踏み出したと思います。研究指導・学院論文審査のあり方はこうした成功例だけでなく、今は失敗だったかもしれないが将来の成功につながることにともつながるので、その経緯を詳細に残して行ってほしいと思います。
- ・喫緊性の高いニーズ(スポーツ)によるプロダクトにも対応されており、優れた成果を上げていると思います。
- ・学生との面談を通じて、かなり個性的な博士がこの人間情報学から生まれそうな

予感を感じました。まさに多様性を追究していると思いました。H28、H29 の修了生 7 名の就職先 1 名だけアカデミア、他 6 名はそれ以外という結果が領けました。3つの人材育成目標 現場力、分野横断力、魅せ方力のバランスの良い配分が功を奏していると感じます。

### Ⅲ. 今後の展望への期待等意見

本プログラムも来年度は最終年度となり、これを持続可能な学位プログラムとしていかに実装していくかが今後の主要な課題となろう。その際、外部資金を得て実施された本プログラムの経験をふまえることは当然であるが、一方で、これを正規の学位プログラムとして設計するときは、もう一度初心に立ち返ることも忘れてはならない。この評価委員会でもたびたび指摘されていたことであるが、教員主導で非の打ちどころなく完璧に整備されたプログラムは、ともすれば学生の主体性を削ぐことにもなり、それは大学院とくに博士の学生を育てるしくみとしては理想的であるとは言えない。教員にとっても、完璧さを求めることはかなりの負担であり、それは決して持続可能なものとはならないであろう。この点もふまえた制度設計を期待したい。

エンパワーメント情報学プログラムは人間学に情報学がはいるという人間情報学を具現化するものである。

自動運転システム、サイバーセキュリティ、百寿者（センチナリアン）社会に向け、今後は情報社会システムの中での人間のダイナミックなプロセスを知り、適切なフィードバックを行っていくことはますます重要となる。

その中で、エンパワーメント情報学プログラムが系として、筑波大学の中で学位プログラムとして定着されることは非常に重要である。

今後は、未病など継続したエンパワメントが必要な分野にも取り組んで成果が出ることを期待したい。

本資金支援機関終了後、学位プログラムの定着が大きな課題であると思います。学生との面談で感じたことは、このプログラムの良さはやりたいことを概ね受け容れられたという資金面で充実していたことが大きな条件ではなかったかと感じました。

「金の切れ目が縁の切れ目」にも対応していける、Sustainable なマネジメントの実現に期待します。その場合、特に、人材と資金確保が鍵になると思います。本プログラムは教員の努力もかなり効いていると思います。その教員が個性的な学生の確保（ロコミがロコミを生むのも含めて）、人材育成関連の競争的資金の継続的確保など何年計画で手堅くマネジメントすることが必要になるかもしれません。

これらの意見、指摘事項は、今後事業の定着・発展に向けて、筑波大学側で継続的に検討の上、改善に向けての適切な対応がなされることを期待する。

平成30年9月  
エンパワーメント情報学プログラム 外部評価委員会  
委員長 原島 博  
岩野 和生  
土井 美和子  
萩田 紀博